

逆戻りの家—南相馬小高区における住まいの改築・小規模集落型復帰に向けた取り組み例—

提案者：福島復興再生住宅協会
 TEL：0241-65-1001 / FAX：0241-65-1002 (担当：株式会社はりやろくスタジオ)
 E-mail：info@haryu.co.jp HP：http://www.haryu.jp



集落の小高い丘の上につつ住宅はアプローチをスロープ化することで、高齢者にも利用しやすい住宅に変化した

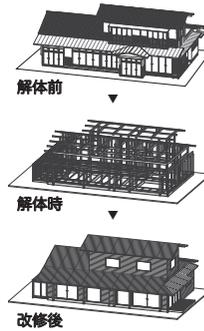


一室空間化されたLDK。2Fを減築することで生まれた吹抜けにより空間の広がりを感じることができる

5年目の蘇生

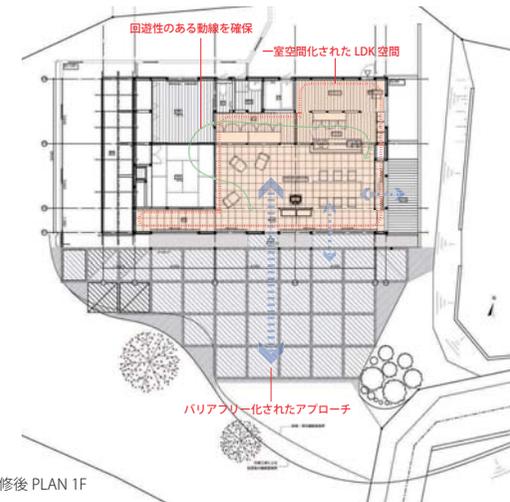
改築の場合でも内外装が新築に近いものや、基礎や骨格以外を作り直すケースもあるのかもしれない。2016年4月1日に復帰が許される南相馬市小高区の住民の一人が、その日に合わせて改築計画が始まった。外見は必要最低限しか変えずに減築（床面積が減る空間は豊かになる）の共通のしほりを作る事にした。

- 作り直さない基礎補強。コンクリートブロックなどを残して、打ち増し補強によって工期・コスト削減を目指す
- シロアリに対する防御。5年近い避難生活の通風換気不足によるリスク解消
- 老後の生活援助動線の確保。終の住処となる年数を目標として、不要な装備にお金を掛ず、欲しい機能をむやみに増やさず厳選する
- これまでの住まなかつた刺激的な場所や要素をひとつだけつくる
- これまでに起こった禍福を受けとめて、今後の目標のもとでローコストの改築を実現してゆくプロジェクトの1つです。

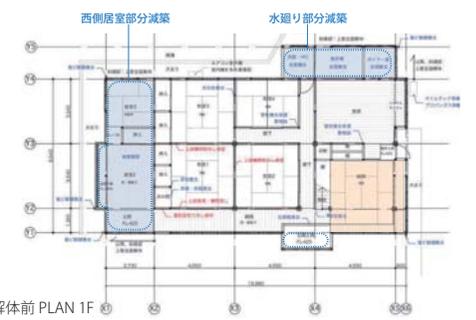


仮死状態だった集落を再生する

南相馬市小高区の避難指示解除準備区域に指定されている。現在は昼間は自由に家の中にはいることができるが、夜間においては宿泊が禁止されている地区である。既存自治体の動向に個人の居住の選択肢を合わせていくことは、復帰の際の一般的な動きである。一方で、震災以降の小規模集落形成は、自治体の動向に具体的には明記されていない、原発避難以降に見られる独自の初源的な動きといえる。こうした小規模集落形成には、高齢化によって進んでいた集落の過疎と、原発事故による放射能の影響により左右される。これら今後の復帰に向けた集団形成と、核家族を基準とした個人的再建の動きとは、分けて考えることが復興のシナリオを考える上では重要といえる。今後は自治体やNPO法人が主体となりサポート事業を継続し、仮死状態の集落を再生する事になる。



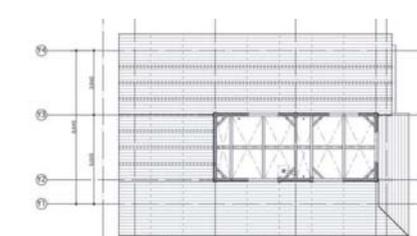
改修後 PLAN 1F



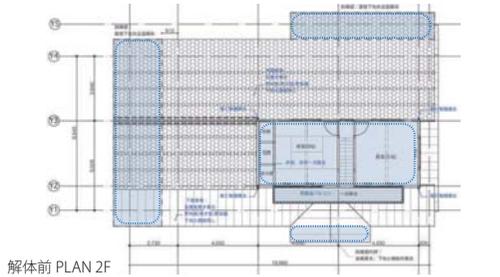
解体前 PLAN 1F

改修のポイント

- 基礎・・・既存のコンクリートブロック基礎を鉄筋コンクリートで補強する。白蟻対策として、床下に防湿シートを敷き込み、土間コンクリートを打設する。
- 外壁・・・外装材は更新せず、屋内側から断熱材を付加する
- 屋根・・・屋根の葺き替えを想定する。小屋裏に断熱材を付加する。
- 天井・・・使わなくなった2階は床を抜き、土間リビング上部の吹抜けとする。
- 開口部・・・標準的な断熱性能を確保する。



改修後 PLAN 2F



解体前 PLAN 2F

	基礎	外壁・屋根	断熱	意匠	バリアフリー化
改修前	土間の一部土が露出した状態	瓦屋根+板金屋根	断熱材は不均一な状態	解体前の和室	玄関には段差があった
解体時					
改修後	既存CB基礎の補強を行った	ガルバリウム鋼板葺き	断熱材は新たに投入直した	仏壇建具、書院、欄間は既存を再利用	アプローチにより段差を解消した